

# Rihoの ドイツ便り

No.64

## ごみの山を緑地に



ハノーファー（人口約50万人）の郊外ラーエという地区にごみでできた丘がある。3年前まで70年以上にわたって、市内で生まれたあらゆるごみが運び込まれてきた、ごみの山である。第3セクターでごみ処理を請け負うアハは、その地を緑化しようと奮闘している。

1937年からごみが搬入されたラーエの埋立地は、大きなサッカー場30個分に当たる28ヘクタールという広さで、1000万立方メートル分のごみが入っている。ドイツではごみは、ただ埋めるのが一般的だった。ラーエ帯はもともと湿地帯で泥炭が採れたが、その穴にごみを埋め始めた。地盤がゆるく重いものはずぶずぶ沈むため、トラックは入れず、線路を引いて列車で運び込んでいた時代もあった。

しかし80年代初頭より量が爆発的に増加。年間100万トンのごみが生み出され、ほとんどは分別もされずそのまま埋められた。現在は分別が進み、出るごみは年間30万トンと減少している。

ごみは目に見えるところに積んでおいて「ごみが増えると大変なことになる」という意識を喚起するんだ、と以前ドイツ人から聞いたことがあるが、それでもごみは増え続けるばかり。2005年の法改正により、家庭ごみの埋め立ては禁止となり、ハノーファーでも機械生物的処理場による分別、そして焼却が始まった。

ラーエのごみの山は高さ121メートル。ハノーファーは平らなので、ごみからできたこの丘から市内が一望できる。現在は土や砂利で覆われている。見晴台を作れば市民の憩いの場になるかと思っただが、ふもとに機械生物的処理場やごみ焼却炉があるので不適切だという。しかし、モズやトカゲが住み、子どもたちや市民が社会見学にくる場所となるだろう。

緑化には、ごみの上にながれき、ガス抜き層、コンクリート層、ゴム密閉層、排水層と重ね、最後に1メートルの土を盛る。汚水や有毒物質がもれないようにあちこちビニールシートで遮断する。3600万ユーロ（36億円）が見込まれており、緑化への道のりは長い。

田口理穂 ごみかんドイツ特派員

## ドイツで子育て♪



「原発おこわり」のTシャツで、Vサインも日本で覚えたよ！（松本にて）

日本に里帰りしていました。明は5週間みっちり長野県の幼稚園に通い、日本語の語彙が増え、表現が男の子っぽくなりました。これまで「行くよー」と言っていたのが「行くぜー」に。地震体験車に乗ったり、制服、遠足、身体検査、避難訓練、授業参観、バス通園と盛りだくさん。どれもドイツにないものばかりで、刺激いっぱいでした。

幼稚園は終わりという日「ドイツに戻るから、みんなにバイバイしようね」というと「もう、来ちゃいけないの？」と悲しそう。「また来年、こようね」といったら、少し考えてから「うーん、ぼくもうおじさんになっちゃうかも」。どうも時間の概念が違うみたいです。

滞在中には「囲む会」を開いてくださってありがとうございました。みなさんとお話できてとてもうれしく、そして大きな励みになりました。これからもよろしくお願いします。